

支えあふくつとの素晴らしさ

医療法人社団・社会福祉法人 悠愛会理事長
山形県老人保健施設協会会長

大島扶美さん



18歳で他界した従兄弟の生き様と遺された言葉に「医者」の道

子供時代、不幸にも医学から見放され、治療法がないという病を抱えていた従兄弟と一緒にすごしました。社会的に虐待を受けている彼を見て「なんとか、しなくては。」との思いと、18歳で亡くなる時、手足も動かず、息絶え絶えの中「それでも目の見える自分は幸せだった。目の見えない人は自分より辛いだろう。その人に自分の目をあげて欲しい。」と言い遺した彼の言葉に身震いを感じました。

辛い生活をしてきても命の瀬戸際で自分の最も大切なものを残していくという彼を、素晴らしい人と思えました。

五体満足で生まれた人は、何らかの事情で五体満足で生きていけなくなった人を支えて当たり前、支えなければならぬということを学びました。

医学の冷たさを感じ、「病気を治せないまでも何とかならないものか。」と思いを重ねた高校時代、国立新潟大学に脳研究所があり、研究し易い状況にある事を知り医学部を受験。国立大学の医学部受験に、当時はまだ女性には歓迎されませんでした。

「医者」の職業は厳しい選択

「女医は結婚出来ない。子供も産めない。」と反対だった周囲の人々。でも……

りを交わしてなかなか楽しかった。一番の思い出は、末の子がまだおむつや着替えが必要な保育園、上の子供達が小学生、中学生、そして高校生と4つの異なる通学スタイルが重なった時。楽しかった子育て、子供から貰った心のプレゼントは莫大なもの。子供達に何時もありがとうと心から思っています。長男が5年生の時、「お母さん大変だね。大きくなったらお手伝いしてあげるよ。」って。この子は医者になるのが難しいと思っていたのですが、学校の先生が「光るものがある子。」と一言。このことが私を救ってくれました。大事にしていきたいと思えました。今は、立派な医者になって私の医療上の至らないところを指摘してくれます。こんな素敵な子供をくれた主人にありがとう、私に残してくれてありがとうと感謝の気持ちでいっぱいです。

ゆきわじり整肢学園で学べたこと

五体が不満足だからといって世間から隔離する事はいけないのではないかと、可能な限り地域の中で人間として尊厳をもった生き方を保障しなければならぬ。学園での仕事を終えて帰ろうとする時、不自由な体で玄関先まで追いかけて帰らないでとせがんでくる。

私に母親の姿を重ねているのでしょうか。これではいけない。帰れる子は土日には家族の元へ帰すべきだ。職員、家族には反対



大島扶美

INTERVIEW PERSON



PROFILE

大島扶美(おおしまふみ)さん
群馬県出身。大島医院、クリニックメルヘン・あこがれ、介護老人保健施設さくらパレス・メルヘン・あこがれ、特別養護老人ホームあこがれ、グループホームメルヘン、ケアハウスメルヘン、その他地域包括支援センターなど多数運営。

されたが、始めなければ地域のなかで生きていける道が開かれてこない。帰すことにしました。

可能な限り自宅から通いのできるリハビリテーションが必要だと感じました。

仕事と子育ての両立＝開業

4人の子育てと大学の勤務、学園の仕事、研究をやっていくのは無理と判断。

優先順位を決めて、両立させるには開業しかないと決断。そして大島医院を開業しました。子供達を鍵っ子にせずすみしました。仕事の合間にたまには「お帰りなさい。」と声が掛けられたのです。しかし、やがて実は勤務医より開業医の方がもっと大変だということも悟りました。

医院では日本で初の脳性マヒ患者さんの診察(外来)をしました。理学療法士を採用する余裕がありませんでしたので、自分が資格をとり、研修にも参加し、イギリスにも行き勉強しました。

理学療法士にお任せだけではなく、家族にリハビリの仕方を覚えて貰い、自分たちの日常生活の中で、リハビリをできるようにすればいいと学会で主張。今では当たり前になりました。全国で、障がい者が通院でリハビリ出来るようになりました。

自宅を開放 老人デイケアに

ここに来て、高齢者の障がいが増えてきたのです。認知症、肢体不自由等。体が大きいので子供より大変という問題。通常のリハビリでは間に合わない、時間をかけた取り組みが必要となり、医院の隣にあった自宅を開放して老人デイケアとして脳活性化プログラムを提供し続けました。しかし、色んな症状の患者さんがどんどん増えてきました。

老人介護施設の設定

脳の神経細胞は減るものです。神経細胞同士のネットワークを減らさないように、脳を活性化させるのがこの目的。あらゆる五感に快い刺激を与えるべきです。会話は言葉だけでは足りない心の会話も必要。人と人との輪を作り、なじみの関係で昼夜逆転の解消。手先を動かすと認知症にならないと言われていますが、それだけでは意味がない。脳の活性化は、手先や体を動かすことで心の会話、競い合い、コミュニケーションを図り、励まし、喜び合うことが出来るのです。一緒に支え合いながらのばしていく、切磋琢磨して喜びを共有していく。その施設が「さくらパレス」です。

施設が出来て一週間目で「失敗した!」と思いました。重度の認知症の患者さんが、予想以上に利用申し込みに來られた。これほどの多くの患者さんがおられるとは思っていませんでした。お断りした家族の方に「申し訳ありません。」と頭を下げました。そして

山辺町での講演会の折、山形の実状をお話したところ、是非、山辺にも施設を作って欲しいと要請があり、「介護老人保健施設メルヘン」が出来ました。

次に天童市の方々が施設を訪問され、是非、天童にもとの要請があり、「介護老人保健施設あこがれ」が出来ました。

必要に迫られた施設作り そして得られた多くの支援

従兄弟が患った病を少しでも改善したかったのですが、差し迫った今の問題に取り組む事になり、「ごめんね、まだ研究が

素敵な言葉が私をこころい…… そして学生結婚

人の出会いはどういうところで巡ってくるのか解らないものですね。夏休みのある日、「皮膚科の病院の実習に行こうか、料理教室に行こうか迷っているの。」と先輩に相談したところ「皮膚科の実習がいいよ、料理はぼくがやるよ。」って。

なんと私向きな人がいたんだ(笑)運がよかった!(笑)でもね、「つり上げた魚に餌はやらない。」ですって(笑)

支えて、支えられた結婚生活

彼がやりたいと思ったことは支えていく、足を引っ張ってはいけません。彼も、脳研究の道に進む私を応援してくれました。子供が産まれてからも、真夜中、朝方までと続く研究を終えた後、家に電話すると夫は喜んで子供と一緒に車で迎えに来てくれました。私は4人の子供を産みました。今は、一人二人と遠慮深いですね(笑)二人の仕事が大変過酷だったので、新潟では両親、山形ではお手伝いさんの協力もいただきました。支えてやってあげるのでなく、支えてあげることが嬉しいという感じでした。

子供達も自立しなければならぬと感じていました。山形大学医学部勤務時代には、鍵っ子時代も。でもお手紙ノートのやりと進んでないの。」と報告しています。ここに至るまで数多くの方からご支援をいただきました。中でも数々の業績を残しながら、やりたいことをやらせてくれた主人が病に倒れた時「可能な限り自分の側にいて欲しい。」と言。超多忙だった二人の生活、家族のありがたさ、尊厳を感じました。亡くなった主人は「よくやってるな、いい仕事してるな。」と見守ってくれています。私を支えてくれる4人の子供、いい家族、いいスタッフがいます。できることまで頑張ります。

ゆっくりと優しく澄んだ声で諭すように話をされる先生の手には、「さわやかに千の風となつて 大島義彦先生 追悼・遺稿集」の厚い本が、光輝いていました。



そして

「男女共同参画社会の中で思うことです、どちらかというと女性が男性に頼ることが多すぎる。本当の男女共同参画社会とは男も女も変わらない。トラブルを防ぐためにも親も子も同じ、人を支える人間にお互いならなければならない。」と結ばれた。

(編集協力員 今野久子)